

へんげ達とつながり

語り手…これから『ゆうやけこやけ』キャンペーン、『石山の宝玉』を始めます。皆さん、よろしくおねがいます。

一同…よろしくお願ひしましす。

語り手…まずはリプレイ初登場のよもぎに、自己紹介してもらいましようか。それからお互いの『つながり』を決めましょう。他の皆さんも、よもぎとは知り合っているという事にして下さって構いませんよ。

よもぎ…平川屋ってお団子屋さんに住んでるよもぎです。いつもパパ(平川屋の主人)のお手伝いをしながら、一人前のお団子職人になるのを目指してるよ！ よろしくお願ひします。

ひめり…ほうほうお団子。それならそうね、わたしはよもぎには…うーむ、きつと悪戯しても、なんだかんだでお団子くれそうだから『好意』で取ろうかしら。

よもぎ…うう、あんまりしつこいと『対抗』しちゃうよ。

ひめり…大丈夫大丈夫、多分、葉っぱのお札を葉っぱのまましれつと差し出したからいだから。

語り手…葉っぱのお金、じゃなくて葉っぱのまま!?

ひめり…心配しなくても、そんな失敗は三回に二回くらいよ。どう、すごいでしょ。

よもぎ…それならボクは、そこから頑張つて勉強して、葉っぱはお金の代わりに受け取っちゃいけないって覚えた事にしよう！ 少女が差し出した一枚の葉っぱ、それがボクの商売の始まりだった…というわけで『好意』にするよ。

ツククサ…あちからよもぎへは『尊敬』にするのよ。お手伝いえらいのよ。

よもぎ…ツククサさんは巫女さんみたいだし、ボクからも『尊敬』で取るよ。

ひめり…わたしはツククサには、相変わらず『対抗』ね。竜胆(りんどう)の手下だし。

ツククサ…うー…ならあちも、ひめりへは『対抗』かよ？

語り手…それでは準備もできたようだし、そろそろ物語を始めましょうか。

よもぎ…お団子は持った、愛媛のいよかんの箱に入れて、突撃準備OKだよ。

ひめり…おっけー…よもぎはなぜお団子を担ぐ。

ツククサ…お団子おいしいのよ？

場面1. 白津饅神社・昼

語り手…時刻は午後三時ごろ。物語は、皆さんが白津饅(しらつけ)神社の境内にいるところから始まります。

よもぎ…ボクはお団子売りに行こうかな。「ひい、はあ、この階段、ちょっときついよう」耳をタレさせながら登ってくるよー。尻尾だけ残して『ふしぎ』4、『想い』2で変化。ツククサ…あちは神社で午後のそうじしてるよ。みみしっぽありよ。『ふしぎ』と『想い』2ずつ使うのよ。

ひめり…わたしは、登場はもう少し様子を見るかな。

語り手…では、よもぎがえっちらおっちら団子を運びながら、白津饅神社の石段を登っている、その横を巫女服姿の女の子が駆け上がっていきます。この子はこみこといって、石山神社という近所の神社の巫女さんですね。

よもぎ…「わあ、あの子すごいなあ。でも、あんなに急いでどうしたんだろ…？」驚いてちょっと立ち止まったけど、すぐに追いかけるよ！ 「聞いてみれば分かるよね！ よいしょっ、頑張るぞお！」

語り手…こみこは「たのもうー！」とツククサの前にやってきました。どうやら、竜胆に会いに来たようですね。

ツククサ…「こみこ、こんにちはやよ？」ここで、『へんげ』4でこみこに印象判定するのよ。

語り手…それではこみこは、ツククサなら自分のピンチを助けてくれるかな、と思つて『信頼』しておきましょう。

ツククサ…びんちよ？

語り手(こみこ)…「こんにちば！ ……ってそんな事より大変大変！ 早くこの玉、直さなきゃいけないんだけど！」ここで、『こども』4でツククサに印象判定返しを。ツククサ…あちからは心配よ。心配だから『保護』よ。「たま？ ……なおす…？」

なによ？」(怪訝そうな顔)

語り手…そう思つてこみこの様子を覗いたツククサは、『へんげ』4を出してみても下さい。

ツククサ…『想い』1つかって4よ。

語り手…ではツククサは、こみこを抱えている玉に、何か不思議な力が籠められていることがわかりますね。

ツユクサ…「？ もよもよするへんな石よ？」

よもぎ…よし、こみこさん達が話してるところに、ふらふらの状態で走ってきてこみ

こさんの真横に頭から突っ込もう！ その時、手に持っていた箱は上に挙げて守るね。

語り手(こみこ)…「わわっ、待って！ そんな勢いでぶつかられたら、玉がもっと割れちゃう！」胸に抱えて大事に守るぞ！

よもぎ…「ぜえ……ぜえ……走ってるの、見えて……何か心配事かと思って……」

ツユクサ…「よもぎ、こんにちはよ？」

よもぎ…「こんに、ちは。おだんご、いかが、です、か」息も絶え絶えで顔を上げて、涙目でツユクサさんを見よう。

語り手…するとこみこが横から割り込んで、「ちょっとー、他人にぶつかっておい

私にはお団子なのー？」と、ぶうっと頬を膨らませました。

よもぎ…「え、ぶつか……ご、ごめんなさい！ ごめんなさい」耳をふるふるさせて謝るね。『ごども』で印象判定するよ。

語り手…そこまで謝られると逆に困惑するこみこでありました。それはもう、『保護』するしかないでしょうねー。

ツユクサ…「!? けんかはダメなのよ？」

ひめり…じゃあ、この辺りで出て行くかな。「隠れて話を聞いていれば……どうやら、何かお困りのようですね」騒いでいるところに、笠をかぶって変に気取った感じで現れるよ。『想い』から4点使って、耳尻尾あり。

よもぎ…「あう、それじゃあひめりさんが困った状態だよ」

ひめり…「……なんで、わたしだってわかったの？ なんか、こう、旅の侍みたいに

なってない？ もしかして、変化し忘れた？」自分ではお侍に変化して出てきたつもりだったり。

よもぎ…「お気に入りのメガネが外れてないです……。でも、どうして侍さんなんです？」

ひめり…「あっ!? メガネ取り忘れたからか！ ちえっ、折角ミトコウモンって偉

い侍の真似して恩を売って、お団子を貰っちゃおうと思ってただけだよ」

よもぎ…「恩を売るのはポクじゃなくてこちだよ？」こみこさんを指差すよ。

語り手(こみこ)…「この玉は、大事な玉だからあげないよ」

ひめり…「そんな玉なんていらぬわよ。そんなんなら、わたしも持ってるしね。ほら」ポッケからビー玉。

語り手…そんな事をしていると、騒ぎを聞きつけた竜胆がやってきますよ。「ったく、おまえら、一体何の騒ぎだ……」

ツユクサ…「……お、おししようさんよ？」よかったのよ。あち、どうすればいいかこまっていたのよ。

よもぎ…「あ、竜胆さん、こんにちは」

語り手…するとこみこはかくかくしかじかと、神社にあった玉を壊してしまったことを打ち明けます。竜胆はにからさまに呆れ顔になってますね。

よもぎ…「ど、どうしてその玉でキャッチボールしたの……?」

語り手(こみこ)…「えっと、それは……ほら、そんな事より今はこれの直し方を聞く方が大切だって！」

よもぎ…「そ、そうですか……ええっと、それで竜胆さん、ツユクサさん、この玉何

なんでしょう?」

語り手…玉に注目するなら、よもぎも『へんげ』4で判定していいですよ。

よもぎ…愛媛のいよかんの箱を持ちながら立ち上がって、玉を覗いて見るよ。でも『へんげ』1だから首を傾げるよ。

ひめり…「よ、よもぎに無視されて……!! ちくしょー、玉がなんなのよー、わたしもまげなさいよー(ジタバタジタバタ)」

語り手…ひめりも見えます?

ひめり…じゃあ、『想い』1消費して『へんげ』4。といっても、不思議な力があるっただけで、その性質はよくわからないのよね。

語り手…その通りですね。あと、ひめりはこれを見ると、何か親しみやすそうな力だという気がしました。

ひめり…「ふーん、変な感じの玉ね。なにこれ？」ついでに『へんげ』4でこみこに印象判定していい? 不思議な力を見抜いたというのは中々でしょ。

語り手…じゃあこみこは、ひめりに『尊敬』しておきましょうか。

ひめり…うおおおおお！ 得難いものを得た気分だ！

語り手………など騒いでいると、こみことしばらく「自分でどうにかしろ」「そこを何とか！」という押し問答をしていた竜胆がついに折れます。「はあ、わかったわかった。とりあえずこのうるさい奴らを連れていってくれるなら手伝ってやろう」

ツユクサ…「とりあえず、うえ、あがるのよ?」

よもぎ…「上がっちゃってもいいんです?」竜胆さんの顔を伺うよ。

語り手(竜胆)・・・「おお、そうだな。まずはこれからの話を説明するので一旦上げられ

場面2. 白津饅神社・昼

よもぎ・・・せっかくだからお団子を振る舞おう。「ツユクサさん、お皿借りてもいいです?」『想い』4で、今は耳も出しとくよ。

ツユクサ・・・「よもぎ、こっちくるよ」よもぎといっしょに台所いくよ。あちも『ふしぎ』と『想い』2でみみしっほのままよ。

よもぎ・・・連れて行かれるよー。

ひめり・・・こっちも2ずつで耳尻尾。上座にとっかり座ってふんぞり返ってる。そして、さも当然のようにお茶を待っているよ。

語り手・・・こみこは、下座の方に正座してようかな。

ひめり・・・ん、そういえばこみこは初対面だったよね? ……よし。

語り手・・・何する気だ。

ひめり・・・「わたしが、この山で一番、偉い、大将の、ひめりよ! よろしく!」デーンと、言葉のひとつひとつに力を入れて宣言する! ふふふ、こみこよ。わたしを偉いへんげと勘違いするがいい……!

語り手・・・ああうん、こみこは竜胆が一番偉いって知ってるのでスルーします。

ひめり・・・「ケケケ、驚いて声も出ないのは無理もないわ。きんちょーすることないのよ。まあ楽しんで下さい」うんうん、と無駄に頷いてる。

語り手・・・とりあえず台所組は、ひめりに好き放題されないうちにとっと戻ってこーい!

よもぎ・・・では、大丈夫なお皿を貰ったら、近くにあるであろう湯のみを人数分用意して持って行くよ。お茶とお団子は台所に忘れてって、「あれ? お団子がない、何処、何処お!」

ツユクサ・・・「よもぎ、わすれてるのよ(急須とお団子を持ってきて)」

よもぎ・・・「あありがとう! ツユクサさん!」ぱぁーと笑顔を浮かべて受け取って、お団子を並べよう。

ひめり・・・その様子を伺った上で、「……あれはわたしの手下よ」とこみこに言っておこ

う。

語り手・・・こみこ、ひめりのことは変化としては尊敬してるけど、人(?)としては尊敬してない目をしてるから大丈夫ですよ。

ひめり・・・ふっ、わたしがそんなことに気がつく必要があると?

よもぎ・・・「手下じゃないです……」とひめりさんに聞えないように呟いて座るよ。

語り手(こみこ)・・・「(ひめりのほうをちらと見てから)うん、わかっているから大丈夫」

ひめり・・・「偉いもの同士大変よねー」とか言って竜胆に絡んでる。

語り手(竜胆)・・・「(ひめりのことは知らん振りして)さて……これを直すには、幾つかの場所で力を貰ってやる必要がある。最後の仕上げはまあおれがやってやるが、それまでのところはやっておけ」

よもぎ・・・「え……力を貰っただけで割れた玉が直るんですか!」ボクにはただの玉

に見えるし、不思議な力とか知らない。

ひめり・・・「米粒でくっつけるとかじゃないの?」

語り手(竜胆)・・・「そんなことで直るか、馬鹿もの。まあ少しばかり、手を加えてやる必要があるがな。後はこの玉の力でどうにかなるだろう」

よもぎ・・・「た、玉の力って……」割れた玉を恐る恐る見る。

ツユクサ・・・「おししょうさん、これ、なにかよ?」

語り手・・・ツユクサに問われると竜胆は少し遠い目をしてから、「まあ……古いものには、それなりの曰くがあるものだ」とはぐらかしますね。

ひめり・・・玉って今はどんな感じなの? 粉々ってわけじゃなさそうだけど。

語り手・・・玉は今、真っ二つに割れてる感じですね。

よもぎ・・・「これ、もしかして付喪神さんが死んじゃったんですか!」身を乗り出して聞いてみよう。

語り手(竜胆)・・・「いいや、付喪神ではなくて、そうだな……何というか、これ自体が妖力を持った代物、とても思っておけ」

よもぎ・・・「は、はあ……」

語り手・・・竜胆はひめりをちらりと見て、少し考えてから、「兎に角……おまえら、山の写見湖は知ってるな? まずはそこにおける写し水(うつしみ)に事情を説明して、力を籠めてもらえ。わかったか?」

ひめり・・・(わたしはちょっとわからないけど、みんなはわかっているのかしら)という顔でみんなを見てみよう。

よもぎ…(流石ひめりさん、動じてない) そんな顔には気付かずに、ちょっと尊敬の目を向けておこう。

ツユクサ…「……むずかしいよ」

語り手(竜胆)…「わからのならわからんでもいい。露草、おまえには、こいつらの御目付け役として付いて行って欲しいが、頼めるか？」

ツユクサ…「もちろんよ(こくり)」

語り手(竜胆)…「よし、よく言ってくれた。頼んだぞ、露草。そういうことだから、ひめりとよもぎも兎に角行ってこい。道に迷ったりはせんはずだ」

よもぎ…「写し水さんのところに持って行けばいいんですね？ 早く行こうよー！」

ひめり…「待ちなさいよー！ そもそも写し水が誰か知ってるのー？」

よもぎ…「裏山に行けば分かるよ！ たぶん！ ツユクサさんも石山神社の人も早く早くー」

語り手(こみこ)…「みーちゃんは私も知ってるし、大丈夫だよー」

ツユクサ…「写し水は湖いるよ、湖、いけばすぐわかるよ」

語り手…「だって皆さん山に向かうのですが……そこで誰か『けもの』5。」

ひめり…「想い』2消費で5。」

ツユクサ…『想い』2で『けもの』5よ。」

ひめりとツユクサは去り際に、竜胆がこう呟いたのを耳にします。

「まったく、またアレと関わることになるとはな……」

＼ 場面3、写見湖・昼 〉

語り手…白津饅神社から写見湖までは、徒歩十五分ほどの林道で繋がっています。秋まっさかりの今は、紅葉があたりを彩っていますね。

よもぎ…「わぁ、綺麗……。ひめりさんの家の近くも綺麗なんですか？」 期待を込めて聞いてみよう。

ひめり…「え、秋になったらこうなるのは当たり前じゃない？」

よもぎ…「赤くはなりますけど、ここまで一面真っ赤な場所はまた別ですよ！」

ツユクサ…「ふとったりリス、沢山いるのよ」

語り手…『けもの』次第では食べてもいいよ(笑)

ひめり…「ツユクサはいつも食べてばっかか。あ、よもぎ、お団子ちょうだい」

よもぎ…「あ、はい。どうぞ」お団子を差し出すよ。

ひめり…「ありがと。こんなの、わたしたちは見慣れてるし、なんとも思わないけどねえ(もさもさ)」

語り手(こみこ)…「もー、食べてばっかりじゃなくて、玉直すのもちゃんと手伝ってよね」

ひめり…「心配しなくても、ちゃんと手伝わわよ。お団子でも食べて落ちていて」

ツユクサ…「あち食べないよ、歩きながらたべるの行儀よくないよ。」

語り手(こみこ)…「ツユクサはえらいねえ」頭をなでなで。

ツユクサ…「へへ」

よもぎ…「ごめんなさい、ええっと……その玉ってそもそもどんな物なんです？」

語り手(こみこ)…「これ？ うちの神社にあったやつ。霊力が籠ってるみたいだからちょっとくらい乱暴にしても大丈夫かなーって思ったら……割れちゃった」

ひめり…「よく知らないけど、霊力って、そういうもんなの……？」

よもぎ…「れいりょく？」 小首を傾げてひめりさんを見て、それからツユクサさんを見るよ。

ツユクサ…「うにようによしてるのよ……」

語り手…「うにようによ……？」

ひめり…「そうそう、うにようによしてて、たまにはわっとしてるのが霊力よ」

語り手…ひめりよ、お前もか！

ツユクサ…(うんうんと頷いてる)

よもぎ…「すがる目でこみこさんを見るよ。」

語り手(こみこ)…「うにようによ……うにようによ……(適当)」

よもぎ…「わけがわかんないよお」がっかりした顔でうな垂れる。

ツユクサ…「でろん、ちがう、もよんうにょーよ」

ひめり…「いやいや、ふわっとしたかと思ったら、急にどわあんってなるのよ」

語り手(こみこ)…「ああうん、わかるわかるー」

よもぎ…「だれかたすけてー！」 耳を垂れさせて。